

奥武蔵高麗の民家について

山 崎 弘

1 ま え が き

この報告は、埼玉県の南西、高麗丘陵の麓にある日高町（旧高麗村）の比較的古い民家11棟を選び調査遺構としたものであり、最初に高麗概略の歴史、民家のあらましを、次に編年指標、編年を、最後に事例について説明する。猶、本調査にご協力を頂いた日高町教育委員会、並びに調査の便宜を計り快よく家を見せて下さった地元の方に厚くお礼申し上げます。

2 高麗の歴史

日高町は、旧高麗村と隣村高麗川村、高萩村が合併して東西11軒、南北3軒余の現町名に改称されたがここでは主に高麗村を対象とした。

今を遡ること1250年前、奈良朝の霊龜2年（716）に東国7ヶ国の高麗人1799人を武蔵国に遷して高麗郡を置き、安住の地とされたのがこの一帯である。そうして高麗王若光が郡司として一郡を統治し、窯業、紡織を初め牧馬、焼畑の法を日本人に伝える高度の文化をもって居ったが、今日ではその面影の何物もなくなっている。唯、高麗王を祀る高麗神社と、一族の菩提寺として聖天院が往時をしのばせる。

3 概 説

武蔵野の尽きる処に高麗丘陵が横たわり西方秩父連山にと続く。その谷間を蛇行して流れる高麗川が望まれる。流れに沿って山地から、横手、久保、台、高麗本郷、梅原、楡木、野々宮及び新堀の聚落が開け、民家も山地では改造、改修の跡も割合に少ないが、平野部に行くに従い時代の脚光をあびて古い伝統様式から逸脱していく傾向が強い。しかし、民家の規模の大小はあっても様式的には同一系統と見なされる。

3・1 屋敷構え

屋敷地をはっきりと囲んだ例は一般的に少い。従って門のないのが普通であるが稀には長屋門のある家（事例1、3、6）もある。一般に山地では丘陵の南斜面を利用

して切崩した狭い台地に主屋を建てているが平地では、街道よりじょう口（入口の道）を通ると庭を前にした主屋が建ち、主屋の表両側に簡単な附属建物を配置した屋敷構えであって、僅かに土蔵をもつ家（事例、2、6、8、9）も見られる。

3・2 屋根形式

横手部落より奥地では林業が盛んな為、杉皮葺の切妻が多いが、横手を境として下流域では養蚕農家が殆んどで、妻に特徴のある茅葺入母屋が大部分を占め、武蔵平野部の寄棟とは対照的である。入母屋の分布は、埼玉県ではこの地方のみであるが、山梨県、神奈川県との隣接部に拡がって居り、近くでは高麗から八王子、立川、府中方面にかけてその重厚な刈り込み方に特徴をもった家が見受けられる。入母屋の形も調査結果から古い民家ほど表現的なものは見られないが新しくなるに従い妻の刈り込み方に特徴をもたせている。

3・3 主屋の平面

主屋は南向が多く、南東向きも若干ある。規模も桁行8間～10間、梁行4.5間～6間が普通で、桁行13間の大規模の主屋もある。これらの主屋は全て入口が東寄りにとられ、現状では改造の多い部分で僅かに大戸のあった痕跡を残す。

間取りは、現状では改修もあって細分化されて居るが復原すると間取りの発達過程は、変形3間取りが古く、喰違い4間取り、4間取り、接客2部屋を増した6間取りの主屋と発展する。

一番上手は「でい」、「おく」と「へや」で2分され、「でい」、「おく」は妻側に浅い床の間のある接客部分で、「へや」は寝室が普通で細長い閉鎖的な部屋となる。従って、一部を仕切って使うことも考えられる。「へや」の床の間のあるのは後補となる。

真中の部分は、「ざしき」、「おもて」と呼ばれ、裏側「かって」と2室になる。この部分は日常生活の中心となり重要であり、養蚕農家では板張りの養育の場でもある。従って天井も板簀子天井が多い。神棚は「ざしき」境にある。

下手は「どま」と「厩」、「織屋」の土間部分で一般的には「どま」と「厩」、「織屋」が壁ではっきりと仕切られ（痕跡による）柱も半間ごとに建っている処から、古い主屋については後者を省略した。新しいものは厩をそのまま置いた。

3・4 主屋の構造

古い主屋では側廻り1間ごとに手斧けずりの下屋柱を建て入側柱に梁を、あるいは上屋柱につなぎ梁をわたし、半間～1間半入った処で束をたて上屋梁を架けその上に又首を組み棟木を置く小屋組で、又首尻は上屋梁が又首台となる。小屋束は用いてないが大規模の主屋になると上屋梁の上に小屋梁をかけ束をたてる場合もある。

柱の径は普通の柱が12匁～15匁、上屋柱が20匁～30匁ありかなりの差がある。従って上屋柱の位置は一目瞭然となり、その位置から集中してたてられていることがわかる。例えば「どま」と「ざしき」境の梁行方向に、「どま」の独立柱として用いられこの一帯が構造的に密になり丈夫である。しかし、「どま」の真中に「ざしき」境1間ごとにあっては勝手に悪く自然省略され、梁が架けられ束をたて代用される様になる。これは上屋柱に限ったことではなく、側柱、部屋境柱にも影響し代りとして指物が多く用いられる結果となる。

4 編 年 指 標

調査遺構で建築年代の明かなのは僅かに事例3(安政6年)のみで他は不明である。そこで指標となる細部手法について調べ、手法が進歩してゆく改造過程を追求することによって古い家から新しい家となる序列がわかる。

(1) 上屋柱の間隔

上屋柱は上屋梁に達する太い柱で構造的に重要な役割をもつので、密に建てられていれば構造は丈夫になるが平面の利用からするとかってが悪い。したがって新しい家ほど上屋柱の省略が行われる。その密度は「ざしき」の部屋境が多く、間隔も1～2間である。

(2) 側柱の省略

側柱は「どま」廻りでは半間ごとに他は1間ごとに建つのが一般である。調査遺構では「でい」、「ざしき」表の省略があるのは3棟(事例3、6、7)で当初からのものである。事例9は「ざしき」表が玄関となり省略があるのは後で復原すると省略はなくなる。

(3) 指物と鴨居

側柱の省略をして指物を用いる傾向から指物の利用が多い程新しいといえる。その個所は「でい」、「ざしき」境、「ざしき」、「かって」境が早い時期に行われ、遅れて「ざしき」、「どま」境に及び側廻りの順序になる。鴨居は側柱の省略以前にも用いられて居ったが指物にかわって使われだしたのは、幕末より明治にかけてである。(事例3)

(4) 雨戸の位置

雨戸のないもの、側柱に接して建てる雨戸（縁があれば濡縁になる）、縁側の外に建てる雨戸の順に新しくなる。雨戸なしというのは柱間に板戸2本、障子1本の建具を用う。この場合、敷居、鴨居は3本溝となる。

(5) 部材の仕上げ

ちような、かんな仕上げがあるが、ちような、ちようなとかんなの併用、かんなの順に新しくなる。

5 編 年

調査遺構を編年指標よりみた共通の特色によってⅠ～Ⅳの様式的年代序列を試みたのは次の特色によって行った。

Ⅰ……上屋柱の密度が高い。柱の省略が全然みられない。雨戸がない。ちような仕上げである。

Ⅱ……上屋柱が柱の省略により少くなる。内雨戸である。ちような、かんなの併用が見られる。柱の省略はⅢグループより少い。事例9は復原によるとⅠグループに近いが改造を大々的にやって居るので不明の点が多い。従ってⅡグループにした。

Ⅲ……側柱、入側柱の省略が進む。ちような、かんなの併用となる。事例7は接客部分も備わり多列型で雨戸も外雨戸であるが、上屋柱はⅡグループの密度である。

この時期は細部の様式に新旧入りまじりⅣグループへの過渡的なものとなる。

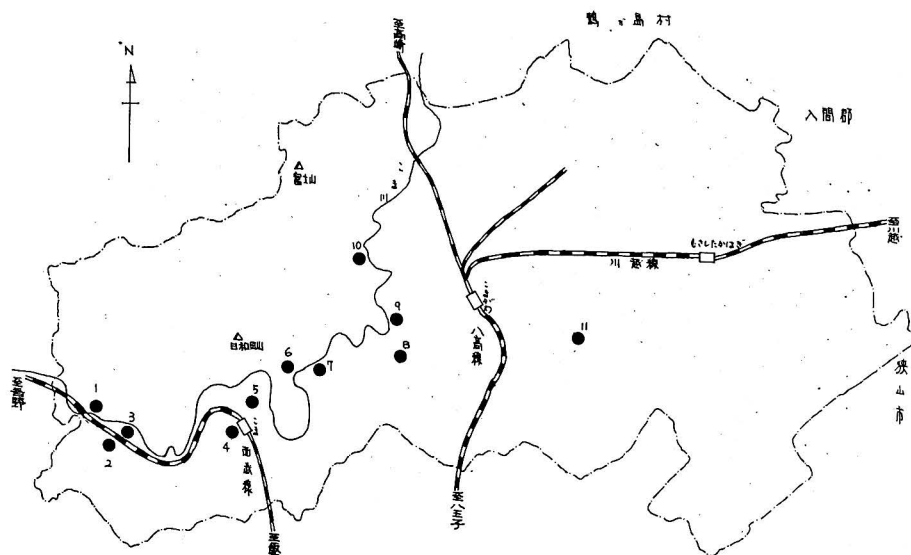
Ⅳ……上屋柱の密度が低い。柱の省略が多く指物の利用度が増す。部材は全てかんなとなる。接客部分も備わり規模も大きくなる。一番新しいグループ。

山 崎 弘

6 編 年 表

No.	所有者	部落名	間取り	構 造						平 面				年代	編年区分
				側柱の省略 てい表	入側柱の省略 ざしき しき境	指物と鴨居 ていざしき お境どま境	ざしき お境どま境	ざしき お境どま境	ざしき お境どま境	ざしき表 の柱間隔	雨戸 の位置	座敷 の位置	飾 の位置		
1	山口宗吉	横手	3 (変形)	○	○	○	○	×	△	184-184 -187	○	×	○	○	I
2	関口喜一	横手	4 (喰進い)	○	○	×	○	○	×	227-227	×	×	△	△	II
3	関口寿雄	横手	4	×	×	×	×	○	×	366	△	×	×	×	IV 安政6年
4	椎橋好三	台	4	○	○	×	○	×	×	212.5-212.5	×	×	○	△	II
5	荻野忠男	台	4	○	○	×	○	○	×	227-227	×	×	○	○	II
6	新井常彦	高麗本郷	6	×	×	×	×	○	○	435	△	×	×	×	IV
7	堀口久太郎	梅原	多	○	×	×	○	○	×	275-184	△	×	×	△	III
8	新井啓三	楡木	4	○	○	×	×	○	○	212.5-212.5	×	×	○	△	III
9	野々宮高良	野々宮	4	○	○	×	○	×	×	174-174	○	×	○	○	II
10	高麗明津	新堀	3 (変形)	○	○	○	○	×	×	190-190-192	○	×	○	○	I
11	大川戸正一	姥田	3	○	○	×	×	×	○	213-213	×	×	○	○	II
備 考			No.9は改造により6間取りとなる	○なし ×あり	○なし ×あり	○なし ×あり	○なし ×あり	○指物 ×鴨居	△貫	単位 割	○雨戸なし ×内雨戸 △外雨戸	○なし ×あり	○しり △押板 △備用	○手斧 ×鉋 △借用	

7 事例の説明



図一 1 日高町略図(黒点は調査遺構)

奥武蔵高麗の民家について

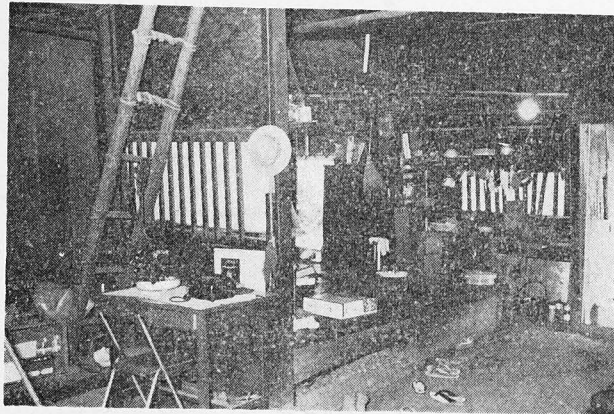
(1) 山口宗吉氏宅

遠祖は山口若狭守重明といい、永禄7年(1564)小田原北条家に仕え、同12年横手の代官職を命ぜられこの地に居住したといわれる。現主は後裔15代目である。

秩父街道に面した屋敷構えで南斜面を切り崩して整地した狭い敷地に主屋と簡単な小屋を配置し、道路に面して長屋門のある小農家程度の民家である。主屋は棟に僅かの反りをもたせた茅葺、入母屋で妻に特有の重厚さは見られない。現状では正面の軒を切り落して杉皮葺の庇をかけ縁を出しているが復原では省かれ、他の軒と同じ様に深く軒を葺き下す。間取りも、多摩小河内に見られる異型広間型で古い。調査遺構では1グループで構造も省略が全然見られない。叉首構造。

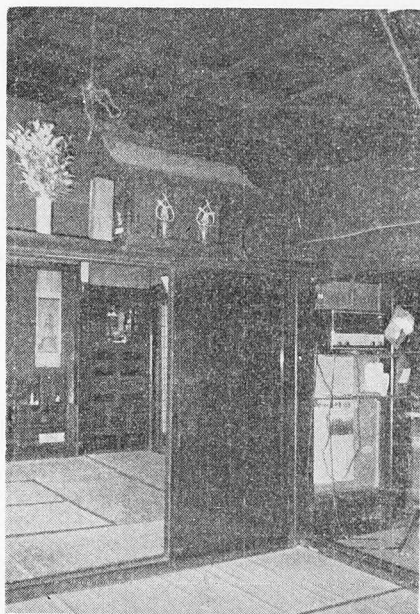


図2 山口氏主屋



同 台 所

(2) 関口喜一氏宅



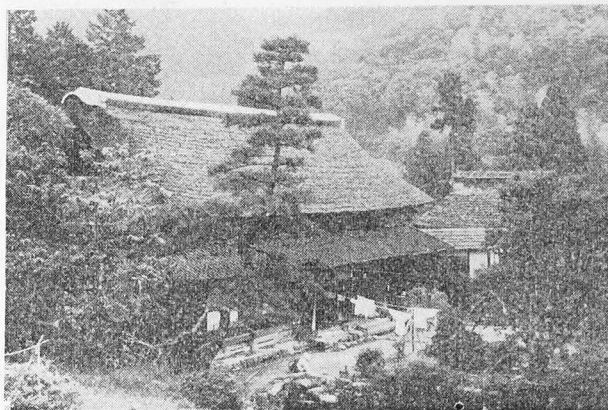
図一4 関口喜一氏 押板を見る

(3) 関口寿雄氏宅

関口喜一氏から南の麓に位置する、言い伝えによると、おばあさんの親の代、つまり安政6年（1859）の建立で、建築年代の明かなのはこの主屋だけである。当時炭問屋の商家で屋敷構も立派であったと言われる。

間取りも養蚕農家とは異なり、玄関、とば、完備した接客部分があって農家の造でないのが歴然としているが後農家に転じた。

上屋柱も少く、側柱の省略も多い。一番新しいグループに入る。軒裏に腕木を出



図一5 関口寿雄氏主屋

し、鼻桁をかけ小天井を張ったせがい造が見られる。この手法は江戸時代格式の高い家に用いられたが幕末から明治になって一般化している。

叉首構造ではなく上屋梁の上にもう1本小屋梁を架け束をたてている。

(4) 椎橋好三氏宅

西武吾野線高麗駅の南約500米の処にある農家。入口下手の物置は近年の建て増し。「でい」、「ざしき」表の側柱表面には雨戸ずれがわかり、内雨戸になる。柱の省略も少くⅡグループにはいる。叉首構造。



図-6 椎橋氏主屋

(5) 荻野忠男氏宅

高麗駅近くの街道に面した農家。最近取り壊し新築された。古い民家が消え去り残念である。指標によりⅡグループにはいり古い。叉首構造。



図-7 荻野氏主屋

(6) 新井常彦氏宅

調査遺構のうちで一番広大な屋敷構えである。高麗川の橋のたもとに入口をもち、両脇にひときわ高い石垣を築き、石垣に沿ったじょう口を登ると、重厚で表現的な千鳥破風に刈り込んだ主屋が望まれる。主屋は桁行13間、6間取りの南向き2階建てで鍵の手に離れが続く。離れは明治25年の建立と云われる。附属建物も一番多い。南側中央間は式台の玄関だそうで改造して広縁になっているが鴨居溝穴にその名残りを留めている。「ざしき」表の平書院、裏側の勝手、書斎と共に昭和10年に改造築されたものである。柱の省略、上屋柱の密度は低く、また部材は全てかな仕上げであり、一番新しいⅣのグループになる。軒裏は梁を側柱から1米外に拮出させ鼻桁をわたして小天井を張った梁せがい造である。棟束を使っている。主人の話では安永元年(1772)建立というが疑問である。箱棟に棟札があるといわれ早い機会に確かめたい。



図-8 新井常彦氏主屋

(7) 堀口久太郎氏宅

慶長2年(1597)に梅原の聚落は全焼し、栗坪に陣屋と共に移った。遠祖は北条氏に仕え、初め高麗町(現高麗本郷)に居住したが、わけあって梅原の現在地に移ったといわれる。現主は15代目である。近年、改築が行われたので不明な点が多い。上屋柱の省略、側柱の省略も少ないが、接客部分が備わっているのは新旧入りまじった様式で新しい様式への過渡期の家と思われる。

(8) 新井啓三氏宅

川越に通ずる街道に面して立派な門構えの屋敷である。旧名主の家柄とか云われる。指標からⅡグループより進んだ様式手法をもっているのでⅢグループにいった。叉首構造。

(9) 野々宮高良氏宅

野々宮神社の社司である。古文書によると天文16年(1547)に野々宮神社は存在し、今日まで代々神職にあった家柄である。

間取りは他の主屋とは異なり、どま部分に相当する処まで部屋にした6間取りであって、台所を北東に送り出した形となる。この間取りは当初からではなく、社司のため必要上改造されたものであろう。例えば、台所境にある大黒柱は元「ざしき」の中央にあったとすると上屋柱が2本並びこの柱筋がどまとの部屋境になってくる。すると側柱の省略もなくなり、他の指標も加味して古い手法となる。屋根の形も「ざしき」部分が寄棟というのは、この地方の屋根形式からすると矛盾する。従って主屋を増改築することによって「ざしき」寄棟、「台所」入母屋、「玄関」入母屋の3棟の屋根形に変わったのであろう。



図—9 野々宮氏主屋

(10) 高麗明津氏宅

高麗王若光の後裔で高麗神社の社司である。高麗神社の後に位置し、主屋も規模小さく小農家程度で現在無住である。

間取りも代々社司という職柄一般農家とは違う。多分修験道を奉じた関係であろう。

屋敷構えも無住のためか現在は主屋のみとに残された感じである。

間取りは事例1に非常によく似ているが「でい」、「ざしき」表寄り1間通りが細長い部屋となって居り入側に相当する。現状では「ざしき」表寄りに入側はなく広い部屋であるが梁下端1間ごとに柱枘穴があり、また部屋境の柱に痕跡が残っている処から入側に復原出来る。他は事例1と同じとみてよい。従って柱の省略も全くなく、

雨戸もないのでⅠグループになって一番古いことになる。西側の縁は便所のわたりであって、別棟の便所が家の中に入る一つの過程を示すものである。叉首構造。

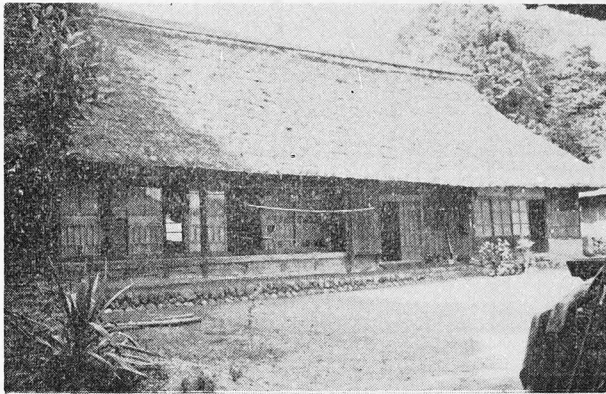


図—10 高麗氏主屋

(1) 大川戸正一氏宅

高麗川流域の民家ではなく、国鉄八高線高麗川駅より東南4軒余の水田に囲まれた台地にある。

現状の間取りは細分化され複雑であるが整理すると3間取り広間型となる。側柱表の縁は大正期に付けられたもので内雨戸となる。構造、平面も古い様式を残し、仕上げもちょうなであってⅡグループにはいる。叉首構造。



図—11 大川戸氏主屋

8 む す び

高麗の民家を要約すると、屋根の形は大部分入母屋で古い民家程妻の刈り込みに特徴は見られない。間取りの発達過程も編年指標から変形3間取り（広間型）が古く、

奥武蔵高麗の民家について

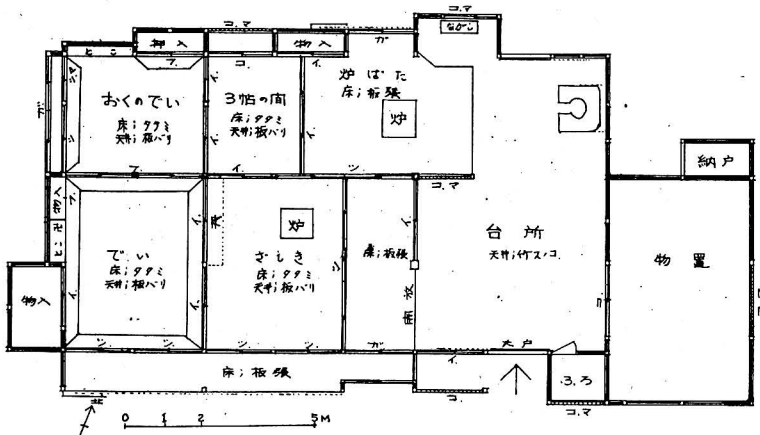
喰違い型、田の字型と進み、更に大規模になると6間取り、多列型になると新しい。構造では、上屋柱の密度の度合い、柱の省略の度合い、雨戸の位置あるいは部材の仕上げ等によって、古い家、新しい家をきめていく。その編年指標の結果高麗の民家を、Ⅰ～Ⅳに区分し様式的年代序列、即ち様式の編年が得られたのである。

参 考 文 献

- | | |
|----------|----------------|
| 民家調査基準 | 日本建築学会編 |
| 埼玉県の文化財 | 埼玉県教育委員会編 |
| 民家図集 | 緑草会編 |
| 日本農民建築 | 石原憲治著 |
| 民家帳 | 蔵田周忠著 |
| 埼玉県の民家 | 拙稿、工学院大学研究論叢2号 |
| 奥武蔵高麗の民家 | 拙稿、民俗建築学会 |

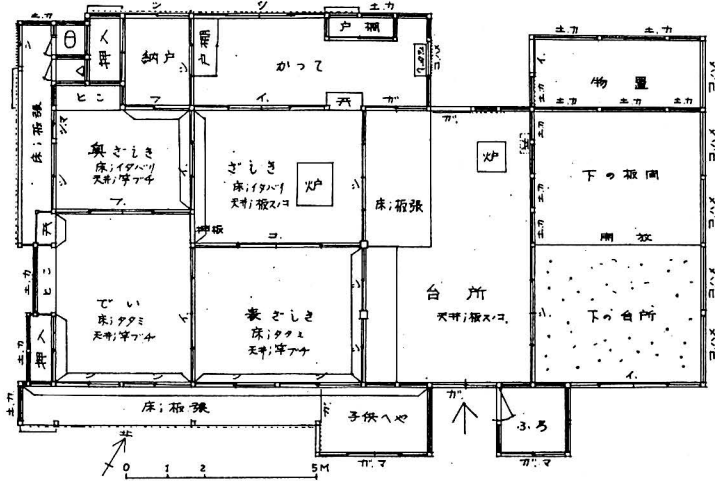
(本学助教授)

図-12 現 状 平 面 図

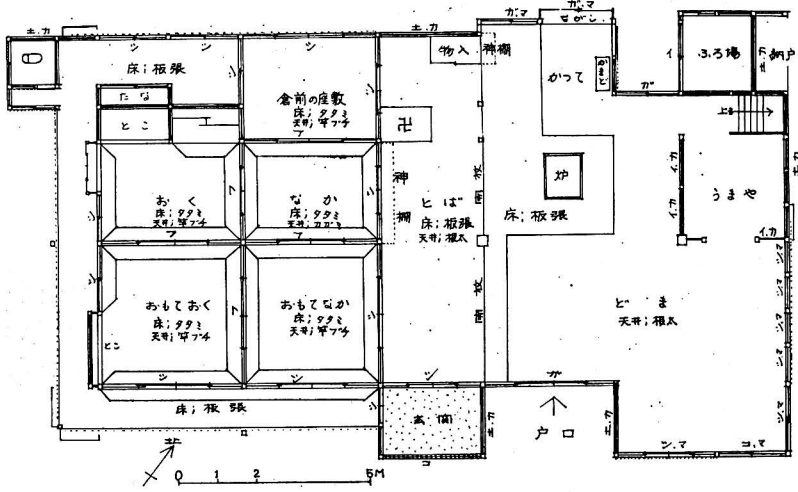


山 口 宗 吉 氏 宅

山 崎 弘

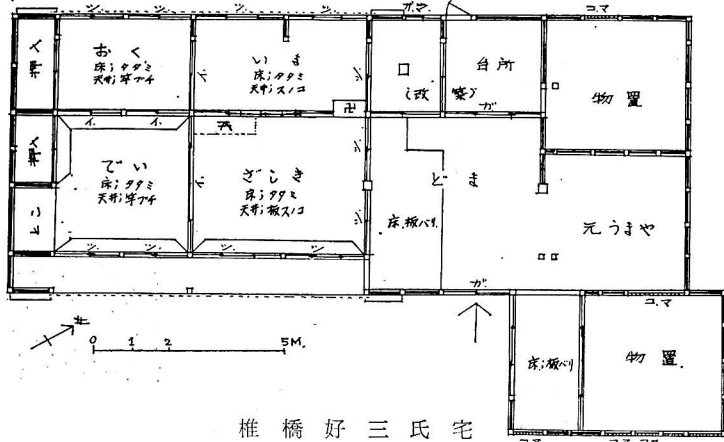


関口喜一氏宅

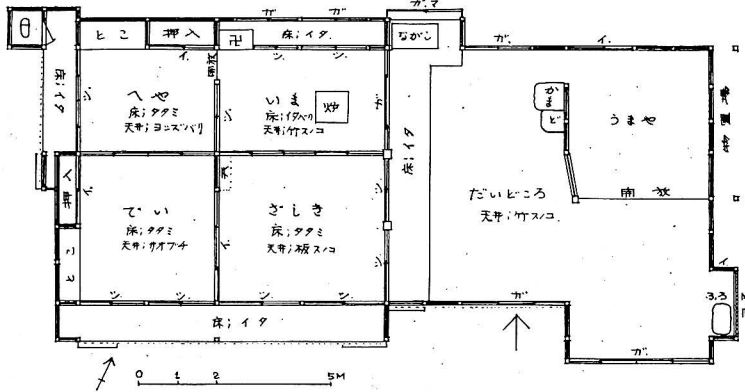


関口寿雄氏宅

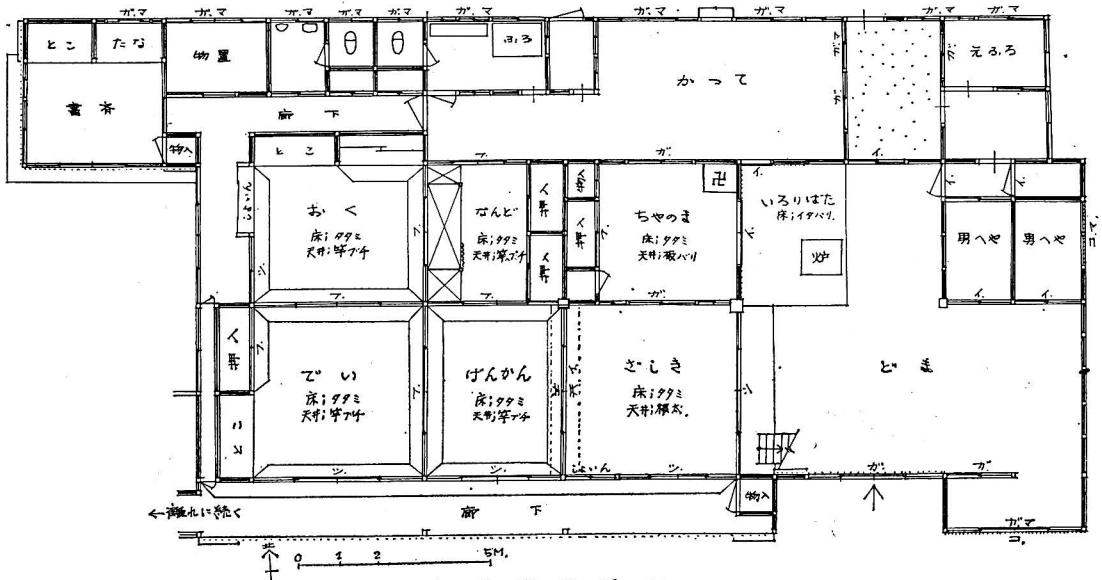
奥武蔵高麗の民家について



椎橋好三氏宅



荻野忠男氏宅

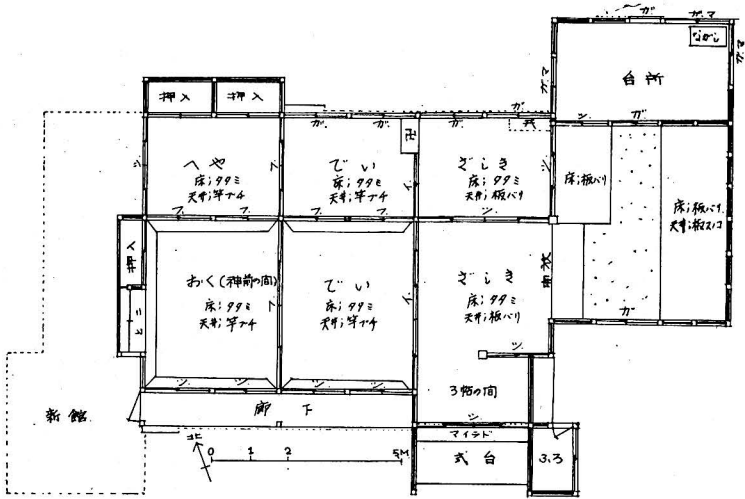


新井常彦氏宅

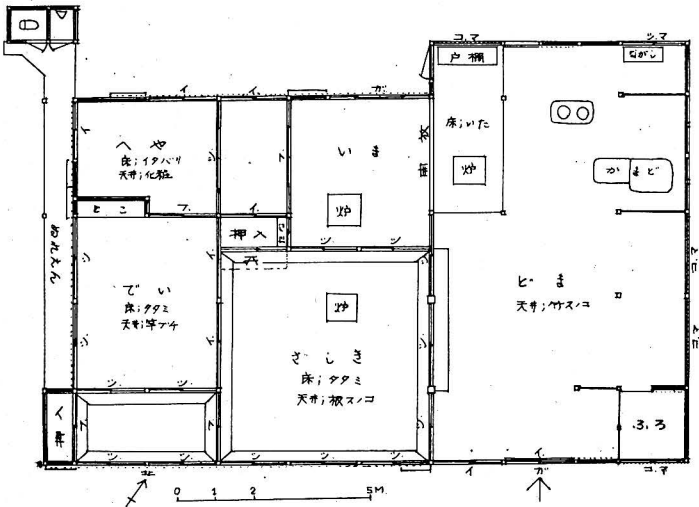
[illegible]

— 151 —

奥武蔵高麗の民家について

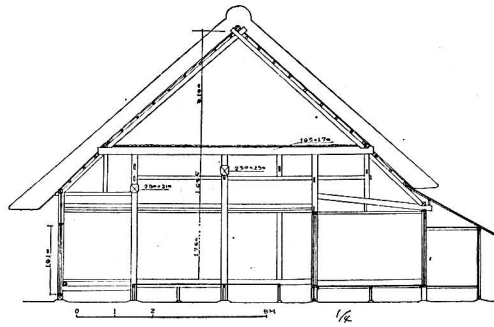


野々宮高良氏宅



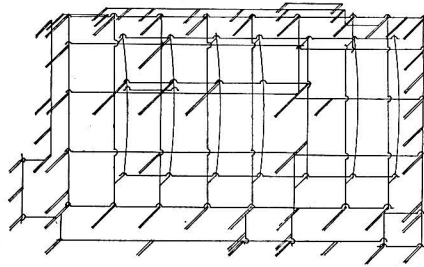
高麗明津氏宅

奥武蔵高麗の民家について

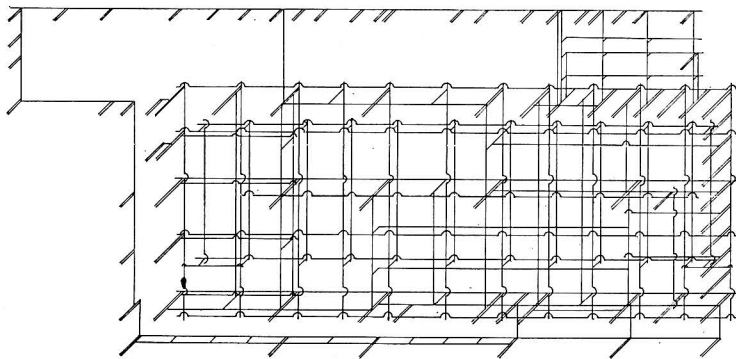


高麗氏宅

図一14 構造図



山口氏宅



新井(常)氏宅

山 崎 弘

図-15 痕 跡 図

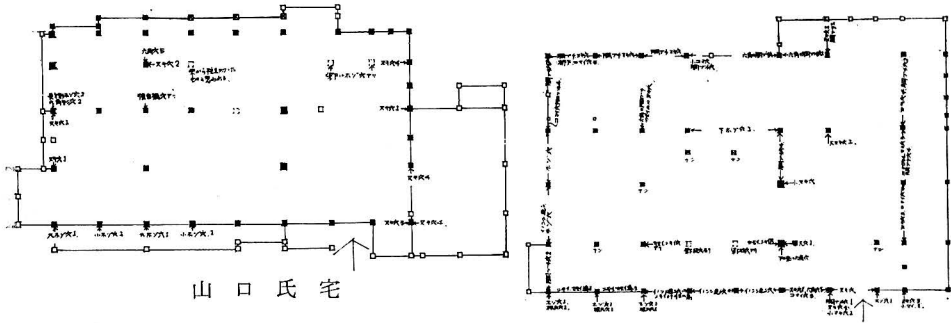
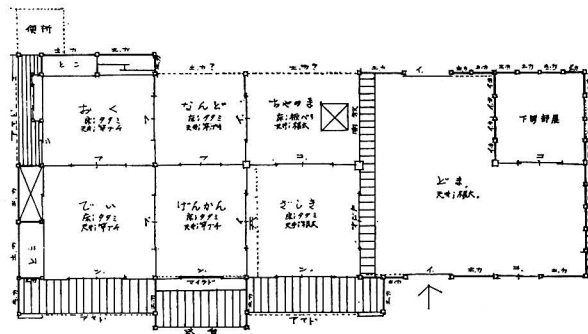
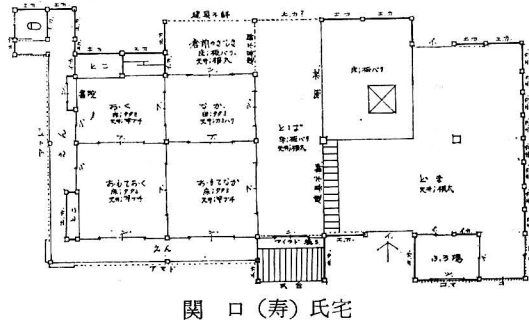
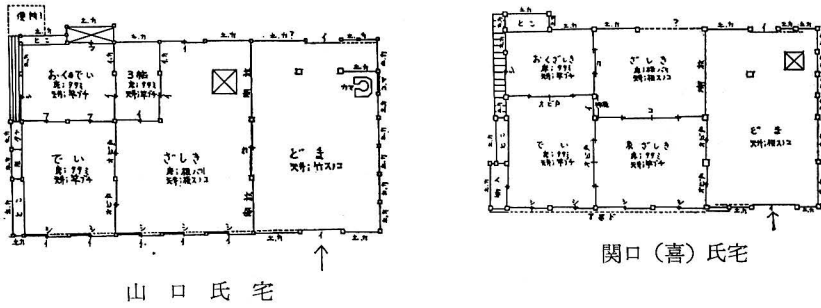
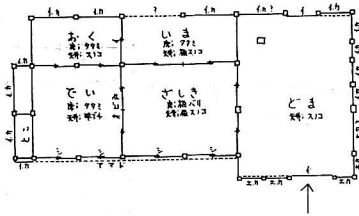


図-16 復 原 図

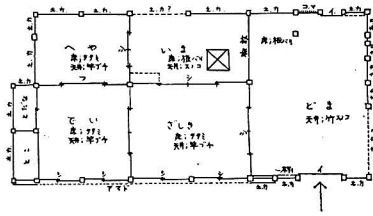


新井(常)氏宅

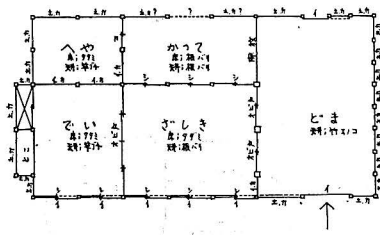
奥武蔵高麗の民家について



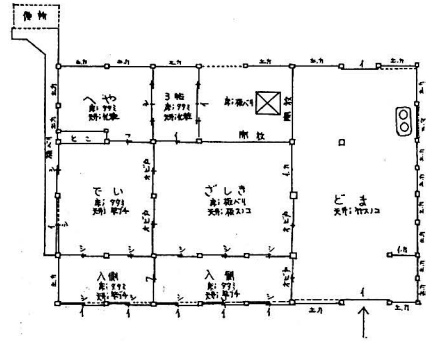
椎橋氏宅



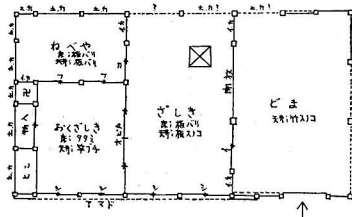
新井(啓)氏宅



野々宮氏宅



高麗氏宅



大川戸氏宅